

Pichio



ノーベル賞 文学全集

NOBEL PRIZED
LITERATURE

後援

スウェーデン・アカデミー

ノーベル財団

This collection of
the Nobel Prizes in Literature
is edited under
the patronage of
the Swedish Academy and
the Nobel Foundation.

主婦の友社

ノーベル賞文学全集 23

シュリィ・ブリュドム

F・ミストラル

カルドゥッチ

タゴール

ヘイデンスタム

カールフェルト

訳者 川崎 竹一
杉 富士雄
河島 英昭
川名 公平
福田陸太郎
田中三千夫
尾崎 義

授与演説および受賞演説の収録に際し
ては、集英社のご厚意を得ました。

昭和 46 年 10 月 5 日 発 行

発 行 者／石 川 数 雄

発 行 所／株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台 1-6

郵便番号 101

振 替 東京 180 番

電話 東京(03)294-1111(大代表)

印 刷 所／凸版印刷株式会社

製 本 所／寿製本株式会社

大口製本印刷株式会社

本文用紙／本州製紙株式会社

表 紙／日本クロス工業株式会社
ク ロ ス

製 函／凸版印刷株式会社

© 主婦の友社 1971 Printed in Japan

0397-522232-3062

- 1 シェンキエヴィッチ キップリング (訳)木村彰一 飯島淳秀
 - 2 ロマン・ロラン イェンセン (訳)宇佐見英治 山口三夫 河盛好蔵 竹内孝次
 - 3 ポントピダン ギェレルブ シュビッテラー (訳)林穰二 高橋健二他
 - 4 ハムスン アナトール・フランス レイモント (訳)山室静 伊吹武彦 鈴木力衛 米川和夫他
 - 5 デレッダ ウンセット S・ルイス (訳)大久保昭男 稲富正彦 刈田元司
 - 6 トーマス・マン ゴールズワージ (訳)浅井真男 佐藤晃一 渥美昭夫
 - 7 ブーニン パール・バック シランペー (訳)原卓也 村岡花子 佐藤亮一 桑木務
 - 8 マルタン・デュ・ガール ピランデッロ (訳)米川良夫 青柳瑞穂
 - 9 ヘルマン・ヘッセ パウル・ハイゼ (訳)高橋健二 小塩節
 - 10 アンドレ・ジッド モーリヤック (訳)若林真 片岡美智 堀口大学 白井浩司 井上究一郎
 - 11 フォークナー ラーゲルクヴィスト (訳)速川浩 山口琢磨
 - 12 ヘミングウェイ (訳)石一郎 高村勝治
 - 13 ラックスネス カミュ アンドリッチ (訳)山室静 山口琢磨 渡辺守章 鬼頭哲人 栗原成郎他
 - 14 パステルナーク ショーロホフ アストゥリアス (訳)工藤幸雄 工藤精一郎 鼓直 ⑬(71.11)
 - 15 スタインベック アグノン (訳)大橋吉之輔 村岡崇光他
 - 16 川端康成
 - 17 ベケット ソルジェニーツィン (訳)安堂信也 水野忠夫他 ⑬(71.12)
 - 18 ラーゲルレーヴ メーテルリンク ヒメネス (訳)香川鉄蔵 川口篤 長南実他
 - 19 ビョルンソン エテガライ ハウプトマン ベナベンテ (訳)毛利三弥 荒井正道 秋山英夫
 - 20 イェイツ ショー オニール (訳)高松雄一 福田恆存 倉橋健
 - 21 モムゼン オイケン ベルグソン (訳)長谷川博隆 氷上英広 松浪信三郎他
 - 22 ラッセル チャーチル (訳)大竹勝 佐藤亮一 ⑬(72.1)
 - 23 シュリィ・ブリュム F・ミストラル カルドゥッチ タゴール ヘイデンスタム カールフェルト
ト (訳)川崎竹一 杉富士雄 河島英昭 福田陸太郎 田中三千夫
 - 24 G・ミストラル T・S・エリオット クワージーモド サン＝ジョン・ペルス セフェリス ネリー・
ザックス (訳)荒井正道 福田恆存 河島英昭 多田智満子 秋山健 生野幸吉
- 別巻 ノーベル賞物語

目次

シュリイ・プリュドム

選考経過……グンナー・アールストレーム	川崎竹一訳……8
授与演説……C・D・アヴ・ヴィルセン	川崎竹一訳……13

シュリイ・プリュドム詩抄……川崎竹一訳……17

スタンス・エ・ボエーム	19	試煉と孤独	20
天頂	21	むなしき愛情	22
詩選集	25	漂流物	23
雑詩集	26		

心の日記(抄)……川崎竹一訳……29

人と作品	川崎竹一……390
著作目録	川崎竹一編……418

フレデリック・ミストラル

選考経過……グンナー・アールストレーム……………杉 富士雄訳……………68
授与演説……C・D・アウ・ヴィルセン……………杉 富士雄訳……………72

ミレイユ……………杉 富士雄訳……………77

人と作品……………杉 富士雄……………395
著作目録……………杉 富士雄編……………421

カルドゥッチ

選考経過……グンナー・アールストレーム……………河島英昭訳……………160
授与演説……C・D・アウ・ヴィルセン……………川名公平訳……………165

カルドゥッチ詩抄……………河島英昭訳……………173

青春の季……………軽重詩集……………185
インテルメッツォ……………新韻集……………205

人と作品……………河島英昭……………400
著作目録……………川名公平編……………422

タゴール

選考経過……グンナー・アールストレーム……………福田陸太郎訳……………216

授与演説……ハラルド・イエルネ……………福田陸太郎訳……………222

受賞演説……………福田陸太郎訳……………226

四重唱……………福田陸太郎訳……………227

人と作品……………福田陸太郎……………404

著作目録……………福田陸太郎編……………425

ヘイデンスタム

選考経過……グンナー・アールストレーム……………田中三千夫訳……………286

詩集

巡礼と遍歴の歲月（抄）……………尾崎 義訳……………291

カロリーネナ……………田中三千夫訳……………295

巫女グンネル……………マゼッパとその使者……………301
ポルタワ……………フレドリックスハル……………322

人と作品	田中三千夫	408
著作目録	田中三千夫編	429

カールフェルト

選考経過	シエル・ストレムベリイ	田中三千夫訳	342
授与演説	アンダーシュ・エステルリング	田中三千夫訳	346

カールフェルト詩抄

田中三千夫
尾崎義訳

349

荒野と愛の詩集	フリドリーンの唄とそのほかの詩	352	358
フリドリーンの楽園とダーラナ地方の飾り画		369	
フローラとポーモナ	フローラとベローナ	373	375
秋の角笛		382	

人と作品

田中三千夫

413

著作目録

田中三千夫編

431

肖像画／ミッシェル・コーヴェ	6、66、158、214、284、340
カラーさしえ／アンドレ・アンブール（シュリイ・ブリュドム作品）	32、33
イヴ・ブレイヤー（F・ミストラルの作品）	80、81
ミッシェル・コーヴェ（カルドゥッチ作品）	176、177
ビエール・アムプロジアーニ（タゴールの作品）	240、241
ガストン・バレ（ヘイデンスタムの作品）	336、337
コルネリウス・ポストマ（カールフェルト作品）	384、385

シュリイ・プリュドム

詩抄
心の日記

一九〇一年受賞（六十二歳）
（フランス 一八三九～一九〇七）



Sully Prudhomme

シュリオ・ブリュドム

授
与
演
說

選
考
經
過

シュリイ・プリュドムに対する ノーベル文学賞授与の選考経過

スウェーデン海外文化振興協会

グンナー・アールストレーム

表面にはあらわれなかったが、スウェーデン・アカデミーは、躊躇や論争やぐずぐずや不安をたびたび繰り返したのち、一九〇一年に、第一回のノーベル文学賞を、フランス・アカデミーの会員、ルネ・フランソア・アルマン・プリュドムであるシュリイ・プリュドムに授賞することを決定した。

この決定はノーベル賞全体の第一回の授賞の時にあたる一九〇一年の十二月十日に、ストックホルムで公表された。

有力なスウェーデンのある日刊紙は、つぎのように審査の結果に感想をのべた。

「委員会は、有名なトルストイもイブセンもビョルンソンも、モムゼンも、スウィーンバーンもゾラもアナトール・フランスも、カルドゥッチも、ミストラルも、ハウプトマンも、ホセ・エチェガライさえも選ばないで——シュリイ・プリュドムを選んだ。しかし、その無害な感傷性ということで現在のスウェーデン・アカデミーによって最もすぐれた最良の詩人として考慮されることがありえたかもしれないフランソア・コッペが選に残らなかったことに我々はせめて満足しなければなるまい」

この評言は、その消極面と最後のあてこすりの中に、はげしい討論がつづいたことを暗に仄めかしている。それは、ノーベル賞の授賞を委されたスウェーデン国内の内部状況をちよつとかがわせるし、また桂冠を受けた詩人の祖国での文学的地位をも、ある程度の範囲で明

示しているともいえよう。

その時はこの賞を受ける国としてフランスが選ばれた様子なので、後世の文学者たちは、なぜその時に、有名なエミール・ゾラやアナトール・フランスが、駆け引きのはげしいこの榮譽ある賞を受賞しなかったのか、と疑問に思うことだろう。

しかし、文芸批評の世界では、当時の公式の關係委員たちがのべている讃辭とは違つた言葉で論評をしている。ノーベル賞は、アカデミックな土壤によつてひ弱くなつた、重厚な物の考え方で被覆された、顔や縁故でつちかわれた、官僚的な理想によつて施肥された、一つの優秀な植物だ、という。長い年月の間、ひきつづいて、この「理想」というきわめて危険性のあることは、まさに、ノーベル賞授賞に関連した討論の中で、たいへん大きな役割を演じて、授賞者候補の選考に圧力をかけたにちがひなかった。

アルフレッド・ノーベルが、彼の遺言書の中で、医学、物理学、化学、平和に貢献する事業、などと並べて、文学に対する賞を残しておいたとき、この文学賞は、「アカデミー」によつて授与されることになつてゐた。

この指定は、スウェーデン・アカデミーに選考と授賞の使命が託されたもの、というふうに解釈されてゐた。スウェーデン・アカデミーは、一七八六年に、スウェーデンの太陽王といわれたグスタフ三世によつて創設された、天下りの学会で、フランスのアカデミー・フランセーズをモデルとして作られたものだった。

創立の当初は、この天下りの創立事業は、いろいろのたいへんな困難にぶつかった。このアカデミーは、まずスウェーデンの文学や言語についての重大な国家的な責任と義務を負う機関と見られていたが、世界的な知識や学識に関する役割を果たす役目をもつものとは見られていなかった。

さらに、このアカデミーは、若い文学者たちからは、意地悪な解釈や批評的になつて曝された。

そして、このりつぱな、もつたいぶつた会議の権限に異議をとなえる連中も多かった。このアカデミーの保守的な精神の伝統は、イブセンやビョルンソンの時代の、オーギュスト・ストリンダベリイの作品を中心に於て發展した高度に現実主義的な文学と、激しく対立するも

のだった。

さらにまた、こういうアカデミーは、反動と反啓蒙主義のための防壁として見られる傾向が強かった。

そのうちに、いろいろの困難な問題も克服されていって、このアカデミーの持つべきデリケートな使命についての建設的な解決法を得るために速やかな対策が講じられるに至った。

一九〇〇年には特別な図書館が開設されて、世界の文学の進展に応じられるような施設ができ、また、アカデミーの委員の中に、ノーベル賞の授賞のための準備委員会をもつことを委嘱された特別委員会が組織された。

そのための事務の中核となったのが、アカデミーの理事長、カール・グヴィッド・アウ・ヴィルセン博士だった。

博士は詩人であり、寛容な人柄で、クリスチャンで温厚な人物だった。また、現代文学の評論家としては非妥協的な気骨のある戦闘的な人だった。

新しくできたノーベル委員会の内部にあって、彼は膨大な管理上の仕事に精力的に当たり、実際のな事務を迅速に処理していった。

ノーベル賞の調査規定に従って、候補者を推薦する書類はすべて、フランス、スペイン、スウェーデンの各アカデミーからスウェーデン・アカデミーに提出されなければならなかった。あるいはまた、他のアカデミーの、人文科学部門の会員たち、あるいはアカデミーに匹敵する機関や協会などのメンバー、および、美学、文学、歴史を教える大学の教授たち、などから推薦され提出されなければならなかった。これらの人々や機関の全体が、選出団体を構成するものではない。しかしノーベル賞選考上高い権限をもつことを、適切妥当な形で、こういう機関に向かって通告することが必要であった。

この働きかけのために英、仏、独語で作成されたりつばな印刷の回状が用意され、各国、各方面に、熱意ある依頼状といっしょに送付された。

そして、推薦状は一九〇一年の二月一日を期限としてそれまでにスウェーデン・アカデミーに到達するように要請された。こうして全ヨーロッパの知識社会の中に網が張られた。そしてどんな大魚がかかるかという期待の中に、何カ月かが経過した。

やがて、いろいろの国から返事が到着した。そして極秘の中に、その返信が検討されて、事前に洩れた様子ではなかった。ひろく一般の耳目を大いに聳動したことは察するに難くない。じつさい、文学生活の常道に似合わないほどの莫大な賞金がノーベル文学賞にかかっていたからだ。

「外国の知識階級たちは、はじめて遠い国、スウェーデンのストックホルムにあるスウェーデン・アカデミーに大きな注目の目をそそいだ」と、ある著名なスウェーデン人が書いたくらいだ。

「世界を通じて、文人たちは、ダナエのような、いかなる詩神のミューズに、教養高きスウェーデンのノーベル賞会議が黄金の雨を降らせるだろうかと、今か今かと待っている」のだった。

今日多大の年月を経て、古い記録の中に隠されていた内情を明らかにできるようなになると、記録が証拠立てる詳細な事情と経過とを我々は幸いに知ることができるのだ。それこそ、世界的な、前例のない種類の大安ケートであり、ストックホルムでいろいろな噂された古いひげづらの小さなアカデミーが、高貴な困難な大きな使命をもつ高い位置にのし上がったことをみとめるのは愉快でもある。

回状に対する返事の全部は丹念に記録に記帳され、発信人のアルファベット順に従って分類され、さいごに、きれいに複写されて、アカデミーの委員全部と、特にノーベル委員会に伝達された。

活動的な戦闘精神の旺盛な理事長のそばには、著名な歴史家がいた。この人はロマン語の教授で文学に造詣が深く、スカンジナビア語の卓越した言語学者で、同時にスウェーデンの古典的遊吟詩人で、すぐれた詩人だったエサイアス・テグネルの子孫であるカール・スノイルスキイ伯爵だった。今日のストックホルムの王立図書館の館長である。

アカデミーのテーブルの上に徐々に積み上げられていった書類はそれだけでも、今世紀初頭の欧州の文芸界の典型的な様相を伝えるものだ。

大英国はいつも保守的な島国だが、カードの上に白地を残して意志を表明している。何の推薦もなく何らの特記した名前もない。

ポーランドは、雄弁な文句でヘンリック・シェンキエヴィッチを推している。この候補者は、著名なスウェーデンの二人の歴史家によっ

でも、同様に賢明な支持をえている。

ドイツはウィルヘルム二世の積極的進出政策の支持のもとにドイツ帝国の最上昇期にあつて、熱烈な調子でこの記録に主張を述べている。

あるドレスデンの教授は、一応は高名ではないがある歌謡詩人^{シュンゲ}を、「彼の広い抒情的才能」に対して考慮を払ってくれるようにと、重たしいことばで推薦している。

またその他、ある推薦の権限をもつ団体は、著名な卓越した文学史家を推している。その名前は今日、色あせた古典本でわずかに知られているだけの人が、本当に学殖豊かな人だ。

ロマン語の言語学者たちは、イェナ大学の老教授W・クロエック氏を筆頭に、ライン河やローヌ河のフランス側にまで視野をひろげて、フランスの南部の、プロヴァンス地方の詩人、フレデリック・ミストラルに注意するようにと、呼びかけている。

しばしば奇異に感じられるような、こういうほうほうに分散した推薦活動に対して、古風な伝統を墨守したりっぱな証言として、フランスから出ている返事には、我々の胸をうつものがある。フランスは、推薦をしてもらう国としてはアカデミックな卓越した見解をもつ国として人々は長い間、そういう期待に慣れていた国だ。

マルサン・ベルツロは多言を弄するまでもなく、エミール・ゾラを候補に推薦している。

ベルツロは一九〇〇年にアカデミー・フランセーズの会員に選ばれて、会員としての資格を利用して、自然科学的手法とデモクラティックな自由主義の思想で自然主義の文学を創始したこの作家ゾラを推薦している。

またエドモン・ロスタンも、長い苦心の作を重ねるまでもなかった。ポール・エルヴィウによつて、『シラノ・ド・ベルジュラック』と『驚の子』を考慮の対象として候補に推薦されている。すべては明白に簡潔に表明されている。

しかし、それ以上のことばといろいろ錯雑した力説と主張をもつて、別な一人の候補者が推薦されている。この候補者については強力な支持と全面的な考慮が明瞭に要求されている。

外国でもスウェーデンでも、ほとんど知られていなかった人がバル

ナスの地平線上に上った。それは、ルネ・ヴァレリイ・ラドで、義父にあたるバストゥールの伝記『バストゥールの生涯』のおかげで、表面的には人々がこぞつて支持している形になっている。

ウーゼーヌ・シュウとエミール・ルグーヴェの甥の子で、『同世界評論』誌の創立者ビュロのさいしょの協力者として、ラドは文学界の栄光の舞台裏と親密な関係にあった。

彼が、ノーベル賞候補者たちの中に顔を出したことは、強力な後押しと宣伝の結果だと想像しても間違ひではないかもしれない。彼をまづ推したのはメルシオール・ド・ヴォグエだった。それから数日置きに、奇蹟的な称賛の書類がエルネスト・ルグーヴェ、アルベール・ヴァンダル、ガブリエル・アノトオ、アルベール・ソレル、シュリイ・ブリュダム、アンリ・ラウダン、などから、ストックホルムへ爆撃のように送られた。

みんなの意見が、『バストゥールの生涯』は理想主義の意義を伝えた刮目すべき文学作品であることを述べている。この宣伝戦のうわさはパリにまでひろがり、一方、コレージュ・ド・フランス校のポール・メイエルは「ヴォグエが推薦したヴァレリイ・ラドは、かえつて余計なじやまだ」と怒った傍注を入れて、南方詩人のミストラルを推薦して、コレージュ・ド・フランス側の、意志と不満の公表、という事態まで発生した。

こういったような中間劇はまったく重厚な委員会を混迷させる性質のものであった。

しかし、その効果は、——パリのアカデミーの姉妹である——スウェーデン・アカデミーが、著名な文人の推薦署名を利用して、一人の高貴な老候補者、第一級のフランス・アカデミー会員を支持したりっぱな態度によつて平衡を保ったのだ。

シュリイ・ブリュダムが、一九〇一年一月十日に出版された重要な作品によつて、ノーベル文学賞候補の中に入ったのだ。その推薦者には、ガストン・バリ、ゼラール、ポール・ブルジュエ、ガストン・ボアシェ、アンドレ・トウリエ、アンリ・ウーセイ、フランソア・コッベ、ルドウィック・アレヴィ、アンリ・ド・ボルニエ、ジョゼ・マリヤ・ド・エレディア、ジュール・ルメートル、フレイシネ、エミール・デシャネルが名を連ねていた。

このブリュドムの詩の本は、それにつづいて、エミール・オリヴィエ、コスタ・ド・ボオルギャール、エミール・ファゲによって賛成承認されるに至った。

この半公式的な性質の大量の意志表示は、他の国々、イタリア、ギリシア、ノルウェー、またスウェーデンから集まった、散票的な選出候補を圧倒した。このスウェーデンの候補のほうは、ガストン・パリが、彼を敬愛したウプサラ大学の同僚から頼まれて推した候補だった。こういう長い間の前哨戦の後にもかかわらず、選定には困難もなく、十一月十四日のスウェーデン・アカデミーの委員総会での最終の決定的決議の後、シュレイ・ブリュドムが、授賞されたという通達を受けた。その授賞理由は、

「最近年にいたるまで、作家としてりつばな業績をあげたその卓越した功績を認め、特に、高邁な理想主義と、その芸術的完成と、また、心情の尊さと天才的才能との、たぐい稀なる結合を具現した作詩に対して」であった。

十一月十九日らしい、新受賞者のシュレイ・ブリュドムは隠棲していたシャートネイの田舎から送った優雅な答礼のことを書き終っていた。

「私はひじょうな誇りとする喜びを自分の中に感じ、また、自分よりすぐれた人たちと、尊敬している作家たちによって争われた、かくも高いすぐれた名誉が、私の祖国の上にふりそそがれんとすることを思っ、たいへん嬉しい感じます。私の作品の中に見出されたこの名誉ある褒賞はすべて、私の祖国のおかげです」

この中にいわれていることは、ただ栄光と祖国のおかげ、ということだけでなく、それにはまた、二十万八千九百五十フラン八十の賞金も付随しているのです。桂冠詩人は、パリの取引銀行の所在地もきちんと書き添えている。

公衆はこのビッグ・ニュースを何ら予感していなかった。桂冠詩人は、アルフレッド・ノーベルの年忌の日である十二月十日の、賞の公式な授与を待って、それまで極秘を守っていてくれるように頼まれていた。この大秘密は、期日が接近しても、新聞がストックホルムでの著名な文人たちの動きをこまかに報道することができなかった理由だ。

レントゲン教授がグランド・ホテルに滞在していることはよくわかっていたが、同教授が来ているわけは、もちろんノーベル物理学賞のためだと見られていた。

ただ消息通の人たちは、文学賞の受賞者の席は空席のままかもしれない、と思っていた。

最初から、シュレイ・ブリュドムからは、長い間の病氣という事情から、やむをえず出席できないことを知らせてきてあった。そのため諸種の計画がさまたげられた。ブリュドムが礼装して授賞式に列席したならば、儀式には特に華々しさを添えたことだろう。それでも、この空席を何とかして埋めるためにたいへんな努力が払われて、代わりの「獅子」を並べる手段が講じられた。

ノーベル委員会の配慮によって、シュレイ・ブリュドムに関する文芸評論家のガストン・パリの論文で、『思想家と詩人』叢書の一冊としてフランスで出たものが、スウェーデン語に翻訳されて、ノーベル賞授賞式の当日、スウェーデンのあらゆる書店にとどけられた。そしてこの翻訳はストックホルムの書店の陳列棚に飾られた。

古い時代にはすべてがにぎにぎしく豪華におこなわれたので、儀式はコンサート・ホールの大ホールの中でおこなわれた。ホールの大円柱には照明が輝き、花飾りも豪華に、宮廷の人々、政府の人々、正式に着飾ったおびただしい名士たちが大ホールを埋めた。

それからまた、続いておこなわれた大祝賀会の間に、祝辞と演説がつぎからつぎへと続き、絶賛の声は高まり、また「ノーベル財団設立一周年記念のために」という、即席のラテン語の詩の朗読までとび出した。その頃は、華麗なことが、綾を織りなす長い文章の中に、秘教の文句のような同時に人を酔わせるような力強い意味を盛り上げて、使われていた時代だった。

シュレイ・ブリュドムに授与された賞は、本人の名とフランスの名の下に、フランスの公使、マルシャン氏によって受領された。当時の新聞の報道によると、マルシャン氏は「ごくさっぱりした本当に民主

1 アボンとニュースが住むといわれるギリシアのパルナスの山。高路

派の詩の象徴。

2 「パリの秘密」の作者。

3 フランスの文芸評論家。文芸史家。

的な服装で、その黒い式服の上には、勲章も飾り紐さえもない」ので、スウェーデンのきらびやかな顯官名士たちとはいへん目立って対照的だった。

しかし、おだやかな人物のシュリイ・ブリュム自身は何を考えてフランスの田舎の隠棲地にいたのだろうか？ それから数日して『フイガロ』紙の記者のインタービューに対して、彼は、微笑しながら、まるで天から落ちてきたような、そして彼が三十五年間に詩によって得た印税の少なくとも四倍以上にも達する賞金額を一挙に得させてくれたこのノーベル賞の前に、ただただびっくりして驚いている、と語った。

「最初の詩集を印刷させる手段さえ持たない私の貧しい若い詩人の仲間たちのことを私は考える。それで私は、彼らの最初の詩稿を印刷できるように詩人仲間たちのためにある程度の金をとっておくつもりです」

いや、驚いたのはシュリイ・ブリュム一人ではなかった。この賞によって特殊の反響を巻き起こしたスウェーデンでもたいへんだった。ノーベル賞授賞後四日して、オーギュスト・ストリンドベリイや、セルマ・ラーゲルレーヴ女史などを先頭にしたりすくれた作家や美術家、音楽家など、四十三人が署名した宣言文が公表された。

「レフ・トルストイへ」

はじめて授賞がおこなわれるに至った第一回ノーベル文学賞の機会に、左記に署名しているスウェーデンの我々作家、美術家、批評家は、貴下に対して我々の意外とする驚きを、表明するものです。

我々は、貴下が現代文学のよき長老であると考えているばかりでなく、たとえ貴下がどんな種類の褒賞にも決して野心を抱いたことがない人柄であるとしても、我々の見るところでは、当然考慮されてしかるべき偉大にして深遠なる大詩人の一人であることを認めています。

したがって、問題のノーベル賞を授与する権限を委されている委員会は、現在の組織の実態から見ても、芸術を厚遇し、あるいは一般の意見を尊重するに適合した審判をあらわしたものと見ることができない、ということ、貴下に申しあげるのにはなおさら我々の責務だと信じています。

自由思想の芸術、自由創造の芸術が、我々遠い国の国民から見ても

最も良いまた最も永続性のある芸術として認められないなどということとは、外国においても決して許されないでしょう」

この文書から見ると、レフ・トルストイは、スウェーデンでは議論の余地のない重要な芸術家として見られていて、彼の作品がこの国の文学の中に深い根を下ろしているという印象を受けるかもしれない。しかしそれは問題が違ふのだ。

それは、皇帝制下のロシアでの独立思想を刺激し鼓吹するのに適当な、古典的な文学であり、象徴でもあるためだ。それ以外ではない。またノーベル賞に関することは、許せない宿敵スウェーデン・アカデミーに対する人々の攻撃にとつて、政治的に好都合なジャンプ台として使われているのだ。

ヤースナヤ・ポリャーナにいた老トルストイは、自分がこういう論争の道具に使われようなどとは夢にも気がつかなかった。それでも、この同情的な親愛感の表明に対して彼は無関心ではおれなかった。

トルストイが、このスウェーデンの抗議団体に対して与えた返事は、じつにトルストイらしいりっぱなものだった。

「私は、ノーベル賞が私に授与されなかったことにたいへん満足だった。第一に、私から見ると、一般に金銭というものは、ただ悪い事しか生み出さないもので、そんな金を手にするという大変な迷惑から私は救われたわけだ。

第二に、個人的には未知であるが、高く評価され尊敬されているたくさんの人々が、私に、たいへんな親愛感と同情にあふれた好意を表明して下さったのは、私の名誉であり、大いなるよろこびであることだ」

じつさいのところ、第一回のノーベル文学賞は、文学上のいかなる好悪感や差別感によっても選ばれたものではなかった。

最近の十年余の経験の光に照らしてみても、ノーベル賞の国際間の親善と礼儀につくした働きの公的な性格はじつにたいへん明瞭にあらわれている。

受賞の讃辞も、高踏派バルナスの詩風の隆盛時代の憂鬱な哲学的詩人に対して寄せられていると同様に、スウェーデンにとっては、昔から豊かな文化的刺激の源であった文学の国フランスに対しても寄せられていた。

さて、祝賀の式の中で、なかなか弁舌さわやかな人で、この賞の理事長で組織委員でもある人から、テグナーやガイエルを出した国、スウェーデンから、ラシーヌやコルネイユやヴィクトル・ユーゴーを生んだフランスに、名誉ある讃美のしるしとして賞を贈ることは、姉妹のスウェーデン・アカデミーにとつてはたいへんな幸せと喜びである」という挨拶のことばがおくられたのだった。

これと同じように、この精神のもとにこそ、シュリイ・プリュドムの祖国であるフランスは、ノーベル賞を受けとつたのだ。

スウェーデン・アカデミーは満足と誇りをもって、公報的な新聞の中に、ガストン・ボアシエ氏の署名で、姉妹国フランスからの感謝の手紙を掲載した。

「スウェーデン・アカデミーの招請に応じて、ノーベル賞候補にシュリイ・プリュドム氏を推薦し、選考に委せたフランス・アカデミーの委員たちは、スウェーデン・アカデミーが授与された賞に對して、フランス・アカデミーの委員たちの名において、はるかに感謝のことはを申し上げることを、私に依頼されました。この受賞の名誉はフランス全国に伝わりました。

シュリイ・プリュドム氏は、全国で尊敬を受け、皆さんから、その性格も才能も愛されています。

プリュドム氏の気品の高い生活、その情緒の高揚、また特に、ノーベル氏が激励し鼓舞しようと望まれた人類の理想の大義に忠実であることは、人々もひとしく認めるどころです。

プリュドム氏がすでに二十年以来会員となつて所屬しているフランス・アカデミーは、プリュドム氏をたいへん誇りとしています。

病氣のためにひきとめられている、氏の隠棲地に、フランス・アカデミーは、書斎用のテーブルを贈呈して、氏と共に全フランスに照りわたつたこの栄光の輝きに慶祝の意を表しました。

この機会に、はるかに遠く隔つた国であつても、事業の共通性と同じ文学の礼讃を共に使命とする、相似た組織をもつて結ばれていると私どもが感じている、貴国の文学協会に對して、私たちの親愛な気持ちをお伝えできることを、私はたいへん幸福に思います。

ガストン・ボアシエ

(川崎竹一訳)

シュリイ・プリュドムに對する

ノーベル文学賞授与に際しての歓迎演説

スウェーデン・アカデミー常任理事

C・D・アヴ・ヴィルセン

一九〇一年十二月十日

陛下
閣下
淑女
紳士各位

アルフレッド・ノーベルが莫大な財産を贈与してノーベル財団設立の決心をしたとき、それは正当な名誉ある行為として、大変な評判と反響とを起しました。ノーベルの全生涯における事業の性質そのものから見ても、自然界の研究にまず筆頭の恩恵を与え、またそういう研究に関する学問のいく種かの中の種々の発見に褒賞を与えることに決めたのであります。

また同じく、ノーベルは世界主義者としての熱望から、平和の友、諸国民の友好的な兄弟化の友となつたのであります。

けれどもノーベルは、その遺言上の意向の中で、文学は諸科学の次に並べられていますけれども、文学にも授賞の場を与えることにしたのであります。もとよりノーベルは諸種の科学的な学問に對して最も魅力と愛着を感じていました。

文学は、文学を開発し育成する人たちもまたノーベルの願望の対象になつたことに對して、ノーベルに感謝しなければなりません。

スウェーデンのノーベル賞のグループの中で、たとえ文学賞が最後